

今年、全国でお米が不足し、スーパーマーケットからなくなると共に、価格が高騰し、手に入れることが困難となりました。そのため、これまで当たり前前に食卓に並んでいたお米のありがたみを実感した人も少なくないでしょう。

農林水産省による「食育に関する意識調査」によると、「食生活は自然の恵みによって成り立っている」と実感している人は八割にのぼり、食べ残しや食品の廃棄が発生していることに関して「もったいない」と感じている人は九割以上だということが分かっています。

しかしながら、日本における食品ロスの現状は、近年減ってきてはいるものの、大きく改善されているとは言えません。

日本では毎年五二三万トンの食品ロスが出ており、これは国民全員が毎日おにぎり一個分を捨てている計算になります。

加えて、食料支援機関である国連WFPが二〇二一年に実施した支援量の約一・二倍であり、貧困や災害時の緊急支援などで世界の人々に対して支援される食品の量よりも日本で廃棄される食品の方が多いうことを表わしています。

日本は、今はまだ食が豊かな国と言えますが、食に対する感謝の思いを一人ひとりが日常の中で行動に移さなければ、それいつまで続くか分かりません。

Yさんは、小学生の子供が三人います。日頃から食べ物のありがたみを教えているつもりでしたが、子供たちはご飯を残した



感謝の念を形に表わす

り、好き嫌いが直らなかつたり、自分の思いが伝わらないことに気を揉んでいました。そんなYさんが、倫理研究所の富士高原研修所で夏に開催される「小学生親子セミナー」に参加することになりました。

セミナーの中では食事の際に「天地（あめつち）の恵みと多くの人々の働きに感謝して、命のもとを謹んでいただきます（ました）」と唱えてから食事をします。

二泊三日のセミナーを終えて、自宅での食事前、子供の一人がブツブツと何かを言っています。よく聞いてみるとセミナー中の挨拶を一人で口にしていました。それを聞いた二人の子供も一緒に挨拶を始めたため、以来Yさんの家では、食前食後に先の挨拶を家族で行なうようになりました。

その後、子供たちは残さないようあらかじめご飯を少なめにしたり、嫌いな物でも食べるようにしたりするなど、食への意識が変わったと言います。

倫理研究所の創設者・丸山敏雄は著書『人類の朝光』の中で、「食物を通じて天地の恩がしのばれ、やがて社会の恩、または生命の根元である父母・祖先……神仏の御恩まで、ひしひしと身に迫ってくる。こうした美しい自然の愛情の上に立って生まれてきたのが、食事の礼儀であり作法である」と記しています。

日頃から何気なく口にかけている「いただきます」という言葉に一層の心を込めて唱えることで、食への感謝を深めていきたいものです。